

特集論文Ⅰ

# 「総合的な学習の時間」における探究的な学習の過程

—和歌山に焦点をあてて—

Process of inquisitive learning in the Period for Integrated Studies  
— Focus on Wakayama —

谷尻 治

TANIJIRI Osamu

(和歌山大学大学院教育学研究科  
教職開発専攻)

早崎 大輔

HAYASAKI Daisuke

(和歌山市立有功東小学校)

受理日 平成 31 年 1 月 21 日

**抄録：**総合的な学習の時間で、自ら課題を立てて情報を集め整理して発表するといった探究的な学習の過程を経験している子どもの学力が高いことが、全国学力・学習状況調査結果から明らかとなっている。一方、和歌山ではこのような学習活動がやや停滞していることも同調査で示された。課題を立てて探究的に学習を展開することの重要性をおさえ、その具体的な指導法について和歌山県内の実践事例を元に検証した。スパイラル的に続く一連の学習過程、特に「課題の設定」が児童らの学習意欲を引き出すことや「情報の収集」→「整理・分析」から「まとめ・表現」へと導き、その繰り返して深い学びへと導く重要性について具体的な実践事例を元に整理することができた。また、指導する教師自身が、地域に愛着を持ち、地域から学び教材開発する必要性を見出した。

**キーワード：**総合的な学習の時間、探究的な学習の過程、主体的・対話的、学力向上、和歌山県

## 1. はじめに

筆者は京都市立中学校で 34 年間社会科教諭として勤務した。いわゆる生徒指導困難校での勤務も多く、そういった学校の学力は、通常の指導のみではなかなか上昇しない。家庭の経済状態が厳しいため、保護者も生活するのが精一杯で、子どもの教育への関心が低いといえる。

しかし、こうした学校でも、生徒たちが協力し合って一つの課題（現代社会が直面している課題）について多角的な視点で調べ、リサーチ活動を旺盛に展開してまとめ発表しあうといった学習スタイルをとると、以後、学習意欲も学力も向上するといった経験を重ねることができた。当時はこういった学習スタイルを「共同学習」あるいは「追究型学習」<sup>1)</sup>とよんでいた。

これは、上記の次期学習指導要領小学校編で、総合的な学習の時間の目標にあげられている「探究的な学

習」とよばれる学びに酷似している。「主体的・協働的」という視点も同様である。

課題を設定して、協働で行う探究的な学習はなぜ学力の向上につながるのか。これには以下の(1)～(4)のような理由が考えられるだろう。

- (1) 書籍（文章）を丁寧に読み、体験し、聞き取りをした上でまとめて発表するという機会が増えることで、読解力・整理・分析力・表現力が鍛えられ、結果として、基礎・基本の習得につながる。
- (2) 興味・関心をもって課題を探究する経験（達成感）が、教科学習への意欲の向上に繋がる。
- (3) 他者と協働（共同）して探究する過程で、否応なくコミュニケーションを重ねる機会が増え、それによって自身の思考の整理を繰り返し、他者の考えを理解しようとする体験が増える。その結果、コミュニケーション力が高まる。
- (4) 協働作業を重ねる中で人間関係も深まることが多く、学びの土壌である学級集団が育ち、学習に前向きになっていく。

しかし、こういった学習活動は生徒任せでは円滑に展開できるものではない。また、課題の設定を誤ると、モチベーションが維持できず、学習活動は中途半端に

### 第1 目標

- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

終わりがねない。それ以前に、こういった探究的な学習の過程を十分に指導できていないケースも少なからずみられることであろう。

そこで本稿では、まず総合的な学習の時間の指導、特に探究的な学習の過程について、和歌山県の課題をとりあげる。次に、その課題が学力と相関関係が深いことを調査結果から示し、早急な改善が必要なることを確認する。そして、現状の克服に向け、具体的な事例をあげることで改善のための提案とする。

## 2. 定着していない探究的な学習の過程

2008 年の「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」<sup>ii)</sup>では、「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく。これを探究的な学習」とし、「探究的な学習の過程を総合的な学習の時間の本質と捉え、中心に据える」ことを強調していた。

しかし、「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」という一連の探究的な学習の過程が学校現場ではまだまだ定着していないことが、諸調査で明らかになっている。筆者が勤務している大学所在地の和歌山県では、この現状が顕著であるため、まず、「平成 29 年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」<sup>iii)</sup>を用いて具体的に捉えてみることにする。表 1 の児童質問紙質問番号 (54) では『「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか』の質問に、和歌山県（以下、すべて公立）の結果は「当てはまる」が 24.1%（全国 27.1%）、「どちらかといえば、当てはまる」が 38.1%（全国 42.7%）と、両者をあわせて 6 割強となっており、全国の 7 割には及ばない。

質問番号 (55) の「5 年生までに受けた授業では、先生から示された課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思いますか」の質問に、和歌山県は「当てはまる」が 29.5%（全国 30.5%）、「どちらかといえば、当てはまる」が 46.0%（全国 47.4%）と、授業での課題設定は全国と比べて遜色ない結果となっている。

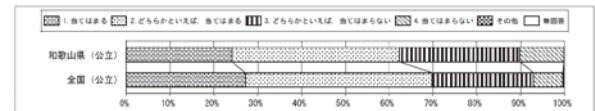
一方、学校質問紙での (40)「調査対象学年の児童に対して、前年度までに、総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしましたか」という質問に対し、和歌山県は「当てはまる」が 12.3%（全国 26.7%）、「どちらかといえば、当てはまる」が 68.9%（全国 58.6%）と、「当てはまる」が極端に低い数値となっている。総合的な学習の時間の中で、探究の過程を意識した取り組みは全国に比べて十分に実施できていないという実態が浮かびあがってくる。

以上の調査結果から、総合的な学習の時間の幹とも

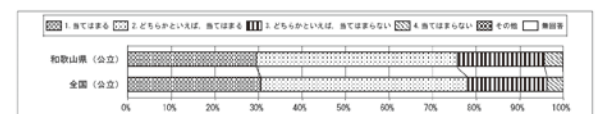
いえる「探究的な学習の過程」の指導が全国的にも不十分であり、特に和歌山県においてこの傾向が顕著であるということが分かる。

表 1 児童質問紙調査結果—和歌山県と全国の比較—

質問番号	質問事項									
(54)	『総合的な学習の時間』では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか									
	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	無回答
和歌山県（公立）	24.1	38.1	27.6	10.1					0.1	0.1
全国（公立）	27.1	42.7	23.1	6.7					0.1	0.2



質問番号	質問事項									
(55)	5 年生までに受けた授業では、先生から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思いますか									
	1	2	3	4	5	6	7	8	その他	無回答
和歌山県（公立）	29.5	46.0	20.1	4.3					0.0	0.0
全国（公立）	30.5	47.4	18.3	3.8					0.0	0.1



## 3. 主体性につながる課題の設定

「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」<sup>iv)</sup>では、「総合的な学習の時間において、探究のプロセスの中で主体的に学んでいく上では、課題設定と振り返りが重要」「課題の設定にあたっては、自分事として課題を設定し、主体的な学びを進めていくようにするため、実社会や実生活の問題を取り上げることや、学習の活動の見通しを明らかにし、ゴールとそこに至るまでの道筋を描きやすくなるような学習活動の設定を行うことが必要」と述べられている。

特に探究的な学習の過程を連続的に行うことで、学習の深まりがみられ、結果的に「直面する様々な変化を柔軟に受けとめ、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」<sup>v)</sup>を考えることで、主体的に学び続けて自ら能力を引き出していく資質の育成につながるとも述べられている。

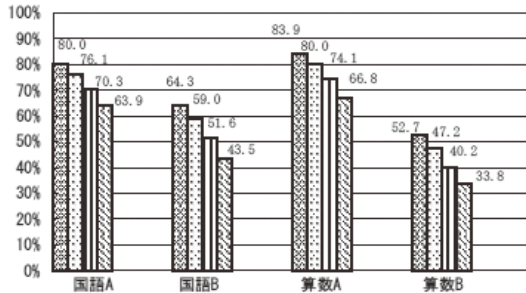
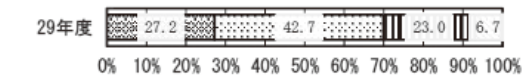
この連続性を大切にするためのポイントが「振り返り」であるといえる。特に、「まとめ・表現」活動をした後にその活動を通して浮き上がってきた新たな疑問などを「振り返り」によって明確化し整理することで、次の課題が必然的に設定されるといえよう。この探究的な学習の過程の重要性については、あとの実践事例『はくらの鯛のふるさと～加太が新たな町づくりに挑む～』で取り上げたい。

ところで、「平成 29 年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」には、総合的な学習の時間と全国学力・学習状況調査の結果について、小学校・中学校ともに強い相関関係がみられる項目がある。「『総合的な学習の時間』では、自分で課題を立てて情報を集め

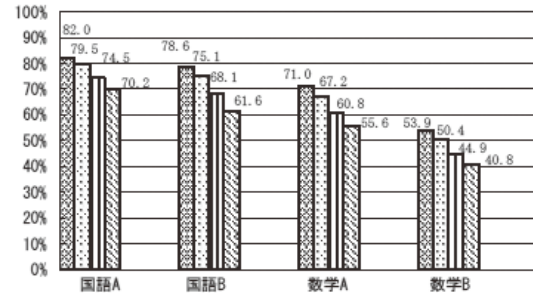
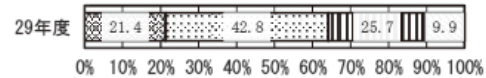
表2 総合的な学習の時間と学力の相関

	質問番号	質問事項
小	54	「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか
中	56	

## 【小学校】



## 【中学校】



整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問事項（小学校は（54））に「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた児童生徒の正答率が、国語・算数（数学）の全分野において「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」と答えた者より極めて高い数値を示したのである。「自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」との質問に「当てはまる」と答えた児童は、国語Aにおいては実に80.0の平均正答率に達しており、「当てはまらない」と答えた児童の平均正答率63.9を大きく上回っている。この相関関係は国語Bや算数Bになるとさらに顕著で、国語Bでは「当てはまる」児童が64.3に対して「当てはまらない」児童の43.5と、実に20ポイントの数値差となっている。「どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出そう」と探究的な学習を積み重ねることは「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続を効率的にこなしたりすること」（いずれも次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ）と矛盾しておらず、汎用性の高い学力の定着につながると思われる。

ところで、学校現場では「自分で課題を立てて」ということを重視するあまり、児童生徒に丸投げに近いような形で「課題を設定」させている例もいまだに少なからずみられる。しかし、「探究的な学習」に対する子どもたちの意欲をどう高めるかは、課題の設定をどのように行うかにかかっているといえる。藤井千春は「総合的な学習の時間の意義」<sup>(vi)</sup>で、「教師は、まず子どもたちの興味関心をそそる環境や教材を準備し、子どもたちの意欲を刺激しなければならない。そして、

「探究」を通じて子どもたちに、世の中の「人・もの・こと」と密度の濃い相互作用をさせ、子どもたちが世の中と自分とのつながりを実感し、世の中と互恵的に相互作用できる自分について自信を深めるように支援しなければならない。教師はそうにして、子どもたちが「探究」において「主体的」になるように導くのである」と強調している。

実りある探究的な学習を実現している教員は、「実社会や実生活から問いを見いださせ、自分で課題を立てさせ」<sup>(vii)</sup>る指導を適切に行える教員である。和歌山市立雑賀小学校6年生の事例<sup>(viii)</sup>は、この課題の設定を教師の見通しをもった指導により、適切に行っている好例である。

同校の藪隆政教諭は『日本遺産であり続けるために～絶景の宝庫 和歌の浦の良さを知り、広めよう～』（6年生）で、まず、児童に和歌の浦で干潟体験をさせたり和歌を詠ませたり、地元の人の話をきかせたりしながら、たっぷりと和歌浦の魅力に浸らせる。何度も和歌浦の「人・もの・こと」と触れることで児童たちは「なんとか昔のような人気スポットに」させたいと考えようになり、「日本遺産“和歌の浦”をもう一度人気NO.1にするには…」と課題を立てる。自分事として考えることができるようになり、根拠をもって自身の考えを述べる際には白熱した議論が展開されることとなる。

同校の細田和希教諭においては、4月当初は意欲に欠け何事に対しても否定的な考えをもつ児童が多い学級で、まず地域の夏祭りに模擬店を出店させることで児童に達成感を味わわせる。その後展開された『日本の“文化”と“心”を学ぼう！～和菓子職人須賀さんの生き方に学ぶ～』で、伝統的な和菓子職人に会わせ、プロの生き方や技術の高さが魅力に満ちたものであることを体感させる。そして「自分たちの和菓子作



り」に、想いを持って取り組むことの大切さに気付かせ、活動に火をつけていく。

このように、「その関心や疑問から、児童はどのような活動を求め、展開していくだろうか、と考える。そして、活動の展開において出会う様々な問題場面と、その解決を目指して児童が行う課題の解決や探究的な学習活動の様相、さらにそれぞれの学習活動を通して学ぶであろう内容について、考えられる可能性をできるだけ多面的、網羅的に予測」<sup>3)</sup>しながら、児童が主体的に適切な課題設定をできるよう指導することが教師に求められている。

#### 4. 探究的な学習の過程を重視する実践

ここで、小学校6年生の指導事例『ほくらの鯛のふるさと～加太が新たな町づくりに挑む～』を取り上げる（文末資料参照：学習指導案を掲載）。

和歌山市立有功東小学校6年光組の担任である早崎大輔教諭が2018年度に指導している光組の学習は探究的な学習の過程を繰り返しながら、スパイラル的に学習を発展させていく事例である。「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」といった一連の過程を丁寧に関わりやすく展開している。

##### 4.1. 加太の鯛への興味付けから課題設定へ

###### (1) 課題の設定：加太の鯛とはどんなものか？

社会科の奈良時代の税制度についての学習で、早崎は「紀伊国はどんなものを調（地方の特産物）としておさめていたのだろうか？」とたずねる。子どもらは「ミカン」や「梅干し」と答えるが「実は加太の塩や鯛が税（調）としておさめられていたそうだよ」「加太といえば、昔から鯛が有名だね」と紹介し、子どもたちの鯛への興味付けを行う。「加太の鯛は本当に美味しいのかな」と誘いながら、「加太ってどんなところ？」「加太の鯛を食べてみたい！」という子どもの関心と意欲を引き出す。

###### (2) 情報の収集：鯛を味わい、鯛の飼育を行う施設の見学や講話

そこで、光組全員で6月中旬に加太を訪問（男女計23名、フィールドワークは学級全員で行っている）し、漁港へ足を運ぶ。生け簀の鯛を見学することで、鯛が身近な存在となり、「鯛を自分たちで飼ってみたい」という言葉を子どもらが発するようになる。さらに鯛料理で有名な活魚料理店「いなさ」で鯛寿司を味わう。6月下旬、光組は加太の漁港と和歌山県北部栽培漁業センターを見学する。センター職員の中村さんから卵から稚魚へと育てる飼育の大変さと喜びなどをうかがうことで子どもたちは「飼いたい、飼いたい」とさらに意欲を持ちだす。中村さんは「じゃ、学校に持って

帰る？」と応え、鯛の飼育に関する水質管理や水温管理などのポイントを子どもたちに伝え、体調2～3cmの稚魚十七匹を光組に託すこととなる。



写真1 北部栽培漁業センターを見学

###### (3) 整理・分析：鯛を飼育しながら、細かく観察

光組の学習活動は体験に基づいて行うことが大切にされている。鯛とはどういう生き物で、飼育するにはどのようなエサや配慮が必要なのかをセンターで聞いた光組は、鯛を飼育するために「King of seaカンパニー」という会社を立ち上げる。そして、光組全員が、水質管理課・育成課・総務課といった組織に属して飼育に専念する。エサ、水質、水のきれいさ、比重（塩分が濃くならないように）などを毎日チェックしながら、鯛への観察を続け、愛着を深めていく。

###### (4) まとめ・表現

途中、種々の理由から死んでしまう稚魚も出るが、粘り強く飼育を続け、秋も深まる頃には体調5cmを超えるほどに育つ。「もう少し大きくなったら、加太の海へ放流しよう。その際には、イベントとして会を運営してみよう」と卒業前に海へ放流したいとの次の目標を持つこととなる。これが、次の課題の設定となって、一連の学習が発展的に進むこととなる。

##### 4.2. 探究的な学習の過程をスパイラル的に

###### (1) 新たな課題の設定：もっと加太のことを知りたい

2学期になると、活魚料理店「いなさ」の稲野雅則さん（加太観光協会の会長でもある）から、手紙がくる。「みなさんの鯛の故郷である、加太の良さをもっとしていただきたいです。一度、めでたい電車に乗って加太の町を探検しにきてみませんか？」と誘いを受け、町探検に出かけることとなる。

###### (2) 新たな情報収集：加太の町の良いところと疑問を見つけよう

10月中旬、加太さかな線観光列車のめでたい電車に乗って加太へ向かい、終日、町探検を行う。この日

はまず町を散策し、観光地である淡島神社や灯台やビーチを巡るが、同時に崩れかけた家やシャッター通りといった寂れた町の様子も間近に見ることになる。さらに、加太の町再生に取り組む東京大学生産技術研究所加太分室の青木佳子特任助教のもとを訪れ、加太の歴史・人口や観光客の変化、活性化に向けて温泉やカフェの開設を考えたりイベントを企画したりしているといった活動にも触れることとなる。



写真2 町探検

### (3) 新たな整理・分析：疑問を整理して聞き取り調査へ

町探検を受けて、感想を交流しながら、「良いなと思ったところと疑問に思ったこと」を出し合っていく。その中で、新たに「観光客は増えたが、増えたゴミのことをどう思っているか」「お店の人はこの先も店を続けたいと思っているのか」「地元の人はこの町に住み続けたいと思っているのか」「海のゴミは台風の影響か」「海の中はどうなっているのか」といった疑問が出てくる。

そこで、次は聞き取り調査（インタビュー）を行って、これらの疑問を解決しようとなる。

### (4) 新たなまとめ・表現：聞き取ったことを交流し、地元の人の思いに触れる

10月末日、「町の人」「観光客」と「お店」担当に分かれて、聞き取り調査を行う。中でも、地元の商店で商いを続けて来た人たちから「美味しいといった感想やありがとうという言葉を聞くと、とてもやりがいを感じます」という声を直接聞くことで、お客さんの数が減っていることへの共感（町が衰退していくことを憂える気持ちへの共感）を強めることとなる。

### (5) さらに新たな課題の発見と情報の収集：鯛釣りに出かけ、漁師さんにインタビュー

光組の学習はこれで終わらない。鯛の飼育を継続しつつ、加太の名物である鯛への関心をさらに強めるために、早崎は新たな仕掛けをつくる。それが「鯛釣り

体験」と「漁師さんへのインタビュー」である。釣り船の三邦丸に全員が乗船し、実際に一人ひとりが鯛釣りを体験するのである。釣果は決して多くはなかったものの、これは「鯛釣りは楽なものじゃない」といった専門家（漁師）のすごさを実感することとなる。この日は釣りのあと、漁師たちへさまざまな質問をぶつけ、さらに漁船にも乗船して、一本釣りの様子や獲れた鯛などに関する話を聞き、漁師たちの漁業と加太への熱い思いに直接触れることとなる。



写真3 鯛釣り体験



写真4 漁師さんに船上インタビュー

### (6) さらなるまとめ・表現へ：加太への提言

光組の学習活動は11月末現在で上記まで進んできた。早崎の中にはゴールがすでに設定されているだろう。しかし、子どもたちと話し合いを重ねて、彼ら彼女らの意思で、一年間の学習のまとめへと誘っていくつもりであろう。

お世話になった「いなさ」の稲野さんや青木助教へ、自分たちが考えた加太の活性化提言を聞いてもらい、相手のコメントを受けて、最終のゴールへと向かっていくという構想を早崎は温めている。

## 5. まとめ

スパイラル的に続く一連の学習過程、特に課題の設定をどのようにすることで子どもたちの学習意欲を引き出し、情報の収集→整理・分析からまとめ・表現へと導き、その繰り返りで深い学びへと導くかについて、具体的な事例をあげて説明してきた。

本論ではあまり触れなかったが、光組の学習活動は下記の総合的な学習の時間の目標(2)にも深くコミットしている点も見逃せない。

#### 第1 目標

(2) 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。

課題が実社会の過疎と町おこしといった現代的課題となっており、子どもたちが主体的に考えることで自分たちの身近な地域が変化・発展していく可能性をも

考えることができることが、光組を本気にさせていったのである。

こういった現代的課題には「正解」はなく、課題を解決するための「最適解」を探る学習となる。そして、こういった課題は子どもたちの課題であると同時に、現代社会（この場合は地域課題でもある）が抱えている難問でもある。大人たちも必死で探っている最善の方策を、子どもたちが自分たちの能力を懸命に出して考えようとすることで、世の中の「人・もの・こと」とのつながりが実感できる。

逆にいうと、総合的な学習の時間では、世の中の「人・もの・こと」とのつながりを実感できるような学習を構想する必要がある。そこで、探究する課題が重要となるのであるが、早崎学級の事例が物語るように、子どもの自発的な発想を待っているだけでは、探究に値する課題は見つからない。早崎は一連の学習を進めていきながら、何度も加太にフィールドワークに出かけ、最前線で加太の課題と向き合っている方々に取材し、相談し、依頼して実践を押し進めている。指導する教師自身が、こうした学びと研鑽を積むことで、加太という地域への愛着を増し、それが子どもたちへと伝播して教師と子どもが共に協働して、地域課題の解決を本気で探っているのである。

今一度、教師は自らが生きている地域へも目を向け、

そこにある現代的課題を解決すべく、地域の人からも学びながら、教材開発に挑む必要があろう。

#### 引用参考文献

- <sup>i</sup> 谷尻治（1999）、荒れる生徒に向かい合う総合学習、共同でつくる総合学習の実践、フォーラム・A、pp189-226
- 谷尻治（2002）学びと集団づくりー「参加・共同・自治」を築く、クイエイツかもがわ、pp139-170
- <sup>ii</sup> 文部科学省（2008）、小学校学習指導要領（平成20年告示）解説 総合的な学習の時間編
- <sup>iii</sup> 国立教育政策研究所（2017）、平成29年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査
- <sup>iv</sup> 文部科学省（2016）、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）
- <sup>v</sup> 文部科学省（2016）、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）
- <sup>vi</sup> 藤井千春（2018）、総合的な学習の時間の意義、総合的な学習の時間の指導法、日本文教出版、p9
- <sup>vii</sup> 文部科学省（2017）、小学校学習指導要領、総合的な学習の時間 第2章目標
- <sup>viii</sup> 近畿社会科教育研究協議会和歌山大会公開授業指導案（2018）
- <sup>ix</sup> 文部科学省（2018）、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編



総合的な学習の時間 学習指導案

1. 日時 平成30年11月21日(水) 5時間目(13:45~14:30)
2. 学年・組 6年光組(男子13人 女子10人 計23人)
3. 小単元名 「ぼくらの鯛の故郷〜加太が新たな町づくりに挑む〜」
4. 小単元の目標
  - ・加太の鯛料理店「いなさ」の稲野さんや加太の人々との関わりを通して、地域活性化に取り組んでいる人々がどんな活動をしているかを知り、地域のために働いている様々な立場の人々の思いを考える。(町づくり)
5. この小単元で育てたい資質・能力・評価規準

知識・技能	概念的知識	加太の現在の状況や課題を知るとともに、現在行われている町づくりの取り組みを知る。
	課題発見	加太の町を探索して、町の様子や人々のくらしについて疑問を持つ。
	情報収集	加太の町づくりについて、町の活性化に関わる人や地元の人々の人にインタビューしたりして情報を集めることができる。
	情報の整理・分析	加太の町づくりのために働いている人や地元の人々から収集した情報をもとに、これからの地域活性のために必要なことを分析する。
学びに向かう力・人間性等	自己理解	自分自身に関わること 他者や社会に関すること
	他者理解	今までの自分の考えや行動 加太の町づくりに関わる人々の考えや、友達との関わり、加太の町づくりに関わる人々の考えや行動の意図をつかみ、その考えを結びつけ、自分の考えを見つめ直そうとする。

6. 指導にあたって

(1) 6年光組の子どもの様子

1学期がスタートしてしばらくすると、「先生、今年の総合は何やるんですか?」と尋ねてきた子がいた。子ども達は総合の学習が好きで、これからどんな活動をするのか期待が膨らんでいるようだった。中には、「動画を作りたい」、「映画を作りたい」という声も聞えてきた。過去の成功体験や学習を、次への意欲として発揮できる子ども達である。ところが、「どんな内容の動画を作りたいの?」等と聞くと、どの子どもも具体的な答えが返ってくることはなく、まだこの段階では「動画を作るのが楽しそうだから総合でやりたい」という意味で、総合に期待を寄せているような子ども達だった。

単元を始めるにあたり、まず、子ども達自身が動画作りを視野に入れながらも、その他の学習材にも関心を持てることを大事にした。動画を作りたいという子ども達の気持ちにも大事にしたいが、それを学習の目的にはしてほしくなかったからである。子ども達が動画以外の何かに没頭していくような魅力ある学習材が何なのかを探っていた。

6光の子ども達は、4月当初から1年生との活動をとても楽しみにしていた。集会などのイベントだけでなく、毎朝そうじの手伝いをすることや給食と一緒に片づけの世

話をやってあげられることを多くの子どもが喜んでいて。また、1学期の初めにはある子が捕まえてきた生き物を、周りの子どもが羨ましそうに見ていた。その生き物がカゴから逃げ出し、いなくなると大勢で教室中を探し、見つかるまで喜んでいて。この子ども達は、小さくて可愛いものが好きで、生き物に愛情をもつことができる素直な子ども達だと感じた。

一方で、学習面や生活面では、指示されたことはやるが、自ら能動的にやろうとする子どもは少なく、自分で考える力や先を見通す力はやや低いように思う。また、勉強は「自分のためにやる」という自己意識、委員会などの仕事で「誰かのためになっている」という他者意識が低く、言われて動く受動的な行動が多い。総合の学習を通して、世の中でいう子ども達が出会えるように単元を計画したいと考えている。ゲストティーチャーとの関わりを通して、情熱を持って自分から行動している人の姿、その人が持っているエネルギーやチャレンジ精神に憧れを抱くような子ども達になって欲しいと思う。今回の鯛を飼育する学習では、自分たちが育てている鯛に愛情を持って成長する様子を楽しみながら鯛に関わり続ける子ども達の姿、加太で町づくりに携わる人々から自分の生き方や考え方をなどを深めていけるような子ども達の姿を期待している。

(2) 学習材・単元について

加太地区は、65歳以上の割合が44.8%で市内3位、空家も200軒で同8位、人口も年々減少し衰退の一途をたどっている。このような現状の中、近年、加太は地域をあげて町の再生に向けた取り組みを広げてきた。加太の魅力により多くの人々に知ってもらうために観光客の誘致を図ったり、地域の主な産業である漁業を守るために水産資源の確保に努めたりと、地域活性のための仕組みづくりを模索してきた。昔から行われてきた鯛のブランド化もその一つで、長年の広報活動により、「加太の鯛」として広く知れ渡るようになった。鯛は、これまでの加太の漁業を支えてきたし、地元の住民にとっても地域活性の足掛かりにしてきた特別な存在であると言える。

その地域活性の中心を担って活動してきたのが、加太にある活魚料理の店「いなさ」の3代目大将「稲野雅則さん」である。料理人としての傍ら、「加太町づくり株式会社」を立ち上げ、収益を地域に還元していく等、町づくりのために各方面に働きかけ尽力している。また、10年前から年に2回開催されている「鯛祭り」を立ち上げたメンバーでもあり、現在も加太で行われるイベントなどの催しを企画・運営している。

そんな稲野さんも、はじめは失敗ばかりだったという。「最初の5、6年は効果ゼロだった。」と話し、観光客の増加が望めなかったこともあったが、取り組みを続けてきた成果が表れ始めた。近年では、南海電鉄の「めでたいでんしゃ」の後押しもあり、約10年前と比べて観光客は5倍以上に増加した。(H18年度:1万5854人→H29年度:8万6329人)

その稲野さんが、今年の4月から東京大学生産技術研究所の青木助教と手を結び、住民と地域再生を目指している。青木さんは、加太に住民票を移し、地元に移り住み、地元の人々の声を聞きながら加太活性の切り口を探っている。現在、地域おこし協力隊の発足に向けた計画や、地域ロゴの制作、古民家をリノベーションしてカフェとしてオープンさせようとする等、住民の目線に立ちながら多岐にわたって活動している。「ゆくゆくは全国に先駆けた地方活性のモデルケースにしたい」と青木さんは話す。

このような、稲野さんや青木さんの課題に立ち向かう姿勢や、町づくりへの思いに触れること、そして実際に町に住む人々の声を知ることが子ども達にとっても有意義な学習になると考えている。また、本単元で学習したことをもとにして、自分の地域である六十谷の町を見直すことができるよう、ものの見方や考え方が育ってくれることを願っている。

(3) 子どもが本気で学び姿を具現化する手立て

9. 本時について
- (1) 本時の目標
- 加太の活性化のためにこれから大切にすべきものを通して、加太の町に関わる様々な立場の人の思いや願いに触れ、地域の人々がつながり、支え合って暮らすことよとよさに気付くことができる。
- (2) 本時の展開

学習活動	※留意点	◎支援	☆評価
○本時の課題を確認する これから加太がみんなにとって良い町になるために一番大切なのは何だろうか？			
○課題について話し合う 観光客を増やす	観光客が増えたとお店の人たちが喜ぶよ。		
突然はたくさん観光客が来る。イベントを開くことが大事。	もつと鰯の美味しさをPRしたほうが良い。		
海をきれいにして鰯や他の魚も育つようにして、海水浴や釣り人がたくさん来るようにする。	でも、観光客が増えて海やビーチのゴミも増えているみたいだよ。		
観光客を増やすだけでなく、人口を増やすの必要だ。	青木先生はその方法を研究して町を良くしようと考えている。		
人口を増やす	漁師の数が減ってきているから、漁師になってくれる人が増えないと海が大変になる。		
	漁師が減ると、鰯が育たない海になってしまう。鰯を獲る人もいなくなる。		
	漁師を増やすためにも、もっと暮らしやすい町にすることが大事じゃないかな。		
	でも、何でも新しくするのはなく古い街並みの良さを残すことも大事だと稲野さんが言っていたよ。		
人口が減っても加太の人たちが暮らしていけるのはどうだろうか？			
	・助け合い、絆の深さ ・支え合って暮らしている ・みんな温かく、ぬくもりがある ・地域の人々がつながる ・住人のみんなが地域の課題を乗り越える		
	○ふりかえりをする		

- ※話し合いでは、これまでに関わってきた多様な立場の人々の思いに触れながらすすめていきたい。
- ・稲野さんのように、町づくりをすすめている人はどんな町にしたいと思っているのか？
  - ・住民の人たちはどんな町になることを願っているのか？
  - ・青木さんのように、町づくりの研究をしている人はどんな方法で人口を増やしたいと思っているのか？
  - ・漁師さんは、観光客や釣り人が増えることをどう思っているだろうか？
  - ・加太を訪れる観光客や釣り人は何を期待しているのか？
- ☆加太で生活する人の思いや願いを語っている。

【発言】

☆これからの町づくりのために、人々のつながりが重要であることに気付いている。【ノート】

- ・鰯を育てる体験活動で、子どもと学習材(加太の町)を近づける子ども達にとつて、普段の生活ではあまり関わりのない地域を今回の学習材に選んでいる。そこで、身近な地域として意識できるように加太の鰯を飼育する活動を行った。毎日鰯を世話しながら愛着を持つことで、より自分事として加太地区の課題を捉えることができるのではないかと考えている。
- ・地域の課題と子どもを向き合わせ、自分事として捉える学習課題の設定  
ゲストティーチャーとの学習を計画的に設定し、子どもの思考に沿った関わりが持てるようにする。そして、町づくりを進める上でゲストティーチャーも抱えている地域の課題を、子どもなりに考えられるような学習課題を設定していきたい。

7. 単元の全体構想(全70時間)

○単元名 「加太の町づくり～地域の魅力を町づくりに生かす～」

○単元目標

- ・町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々がいることを知り、その人の思いや願いを考える。(町づくり)
- ・鰯に愛着をもって飼育することを通して、生き物の生命を尊重し、生命現象の不思議さやすばらしさに気付く。(生命)
- ・加太で働く人の存在や、地域を支える様々な立場の人の思いを知り、働くことの意味や自分自身の生き方について考える。(キャリア)

加太の鰯を飼育しよう！

(25時間) + α

ぼくらの鰯の放郷～加太が新たな町づくりに挑む～

(30時間) + α

そしてぼくらの故郷、六十谷の町の魅力を再発見

(15時間)

8. 小単元の指導計画(全30時間+α)

学習活動	評価する資質・能力	教科等との関連
・鰯電車に乗って、加太の町へ探検に行こう。 ・疑問に思ったことをもとに学習計画を立てよう。	・課題発見	
・どうして観光客は増えているのに、人口が減っているのだろうか？ ・どんな方法で町に観光客を増やしているのだろうか？ ④ + α (観察り 鰯釣り体験 漁師さんにインタビュー) ・加太の人口が減っている原因をまとめよう。 ・加太が観光客を伸ばした秘密をまとめよう。 ・これから加太がみんなにとって良い町になるために一番大切なのは何だろうか？ <本時> ①	・情報収集  ・情報収集  ・概念的知識 ・概念的知識 ・整理分析 ・他者理解	
・自分達にできることは何だろうか？ ・加太の鰯をPRして、育てた鰯を放流しよう。	・自己理解	国語 「未来がよりよくなるために」  国語 「海の命」